【原著論文】

大墩保安語の数詞「一」に由来するgə*

佐藤　暢治
広島大学大学院 国際協力研究科 准教授
〒739-8529 東広島市鏡山1-5-1

0. はじめに

自らがフィールドで採集し分析を進めてきたモンゴル系の言語，保安語積石山方言[1]の資料を先行研究のそれと比べると，異なる点が見つかることが少なくない。史的変化を反映するものもあれば，先行研究の不十分さによるものもある。数詞の「一」を表すnəgəが文法化した大墩保安語のgəは，その両者を物語る。

保安語積石山方言には，大墩保安語のほかにも甘河灘保安語，高李保安語，肖家保安語，斜套保安語といった下位方言がある[2]。これらのなかで，少なくとも大墩保安語には数詞の「一」に由来するgəがあり[3]，それ自体はアクセントを取らず，普通名詞などに後置される[4]。

(1)　mɑbu　gə　ɑpətɕir.
　　雑巾　　取ってくる:命
　　「雑巾を取ってこい」

従来，このgəはТодаева(1964)以来，単数接尾辞-ŋge(-ge)と記述されてきた。音形式の違い，また接尾辞か否かという点については史的変化や記述の正確さなどいくつかの要因を考えなければならないが，gəの出現頻度は低く，Тодаеваのテキストを読んでも問題となる要素の機能が名詞の単数形を表すとはとうてい思えない。名詞の単数形を表すというТодаеваの説明は，数詞の「一」に由来するといった点をあまりにも重視しすぎたためと思われる。

本稿は，以上のような観点から，大墩保安語のgəに焦点をあて，第1節では先行研究について，第2節では資料について述べる。そして，第3節ではgəの形態素種別が接尾辞ではなく接語であることを，第4節ではgəの位置を，第5節ではgəの意味機能が排他性であることを，第6節ではgəの談話機能が談話の話題標識であることをそれぞれ明らかにする。

なお，数詞「一」の文法化は，そのほかにも周辺で話されている同系の言語，保安語同仁方言の一部，土族語互助方言及び民和方言，康家語で認められるが，それらとの関係については立ち入らない[5]。それは，本稿の目的が大墩保安語の今を明らかにすることにあるからである。

＊　本稿は，平成 18～20 年度科学研究費補助金基盤研究(C)『中国保安族の消滅の危機に瀕した言語，保安語積石山方言にかんする調査研究』(課題番号 18520319)の交付を受けておこなった研究成果の一部である。また，本稿は日本言語学会第 131 回大会(2005 年 11 月 20 日，於広島大学)にて口頭発表した「大墩保安語の数詞「一」に由来するgəについて」を大幅に加筆修正したものでもある。

1. 先行研究

先行研究として，まず保安語を初めて本格的に記述した Тодаева（1964:22-23）を取りあげる[6]。これは 1956 年の調査に基づくものであるが，積石山方言のどの下位方言を記述したのかについては述べられていない。しかし，そこに掲げられた音形式や Тодаева に保安語を教えた本人（後述する保安族の老人，馬福全氏）の証言から，Тодаева は大墩保安語を記述したものであるとみてよい。

Тодаева は，前述のように，接尾辞の-ŋge（-ge）は「名詞の単数形」を表し，数詞の「一」を表す nege が縮約したものと述べている。-ŋgeと -geの使い分けについての言及はないが，Тодаева が挙げている語例を見ると，母音語幹には -ŋgeが付き，子音語幹には-geが付くことになる。アクセントについての記述は何もなく，-ŋge（-ge）が付いた場合もアクセントがどこに現れるのかはわからない。

Тодаева（1964:123-124）にはテキストとして，「家ねずみともぐら」（家ねずみともぐらが目と尻尾を取り替え，最後にはもぐらの目が見えなくなるという民話）が収められている。それを見ると（2）のように，下線を引いた sexang šantšeg「美しい尻尾」にだけ 2 回 -geが付いている。その後 sexang šantšeg「尻尾」はさらに 2 回現れるが，-geは付いていない[7]。-geが 4 回現れる sexang šantšeg「尻尾」のうち，なぜ 2 回だけに現れるのか，また他の名詞句になぜ-geが現れないのかといった疑問が当然生まれるが，その理由の説明は Тодаева（1964）にはない。

（2） Dadzeg gedži harta Guale avje varsang. Dadzegde <u>sexang šantšegge</u> jisang.
家ねずみともぐら二人は友達だった。　家ねずみには<u>美しい尻尾</u>があった。
Hartade sexang nedong Guar jisang. Dadzeg hartase dzelu jisang.
もぐらには美しい目が二つあった。　家ねずみはもぐらより賢かった。
Negudene harta toorle šdžege gedži šdžesang. Judži ole morde kurse ki fuledži
ある日，もぐらは散歩に行こうとして行った。　出かけて山道まで来ると風が吹いて，
hartane nedongde šaši orsang. Nedongse nemsong tšurdži se ndžegtesang.
もぐらの目に砂が入った。　目から涙が流れ出て見えなくなった。
Harta godži sumugesang:《Naade nedong gise de <u>sexang šantšegge</u> vise sang jisang》.
もぐらは自ら思った。　「私に目が無くても，<u>美しい尻尾</u>があれば良かったのに」
（後略）

陳（1987:78）も 1956 年の調査によるものであるが，鼻音語幹に -gəが付き，鼻音以外の語幹に -ngə[8] が付くと述べている点を除けば，Тодаева の見解と変わりはない。「名詞の単数形」を表し，数詞の「一」を表すnəgəが縮約したものとしている。また，現在の大墩保安語では，若者はただ -gəのみを使い，老人もまた -ngəよりは -gəの使用の方が趨勢であると述べている。アクセントについての記述はない。

布和・劉（1982）は，1964 年の調査に 1977 年と 1980 年の調査を加えたものである。例文を 1 つずつ拾っていくと普通名詞に後置するgəが 3 例（p.52, 62, 72）見つかり，グロスには「一」とあるが，gəに関する説明は何もなく実態はよくわからない。ただし，3 例のうち 2 例は（nə）gəと記してあるので，布和・劉（1982）はgəを数詞の「一」を表すnəgəと同義に捉えているのかもしれない。

2. 資料

大墩保安語の資料として，筆者が 2000 年以降，馬福全氏（1928 年生まれ）をコンサルタントに得た資料を検討する。ひとりのコンサルタントから得た資料であるため，個人差を考慮する必要はない。また，保安語には文字がないため，検討する資料はすべて話しことばである。

gəの談話機能を検討する第 6 節では，佐藤(2005a)の修正版にいくつかの資料を加えたものを用いるが，テキストごとの題名とタイプ，gəの出現数などについては 6.2 節で述べる。

3. gəの形態素種別

「名詞の単数形」を表すか否かという点は，ひとまず置くことにしよう。本稿では大墩保安語のgəを，形態素の切れ目を表すハイフォン付きの-gəと記していないように，接尾辞と見なしてはいない。では，形態素の種別は何であろうか。gəはその直前に置かれた名詞句に倚りかかる接語(clitic)にほかならない。gəが語幹形成には関与しないこと，また音韻的つぎめを表す(3)でのアクセント(声調が反映された漢語からの借用語などを除けば，通例，語末音節が強くかつ高い[9])の現れ方の違いが，gəは格語尾のような接尾辞ではなく，de「も」などとともに先行する自立語に倚りかかる接語であることを示している。

(3)

	対格・属格(-nə)	与位格(-də)	奪格(-sə)	de	gə
ɢo'rɑ「雨」	ɢorɑ-'nə	ɢorɑ-'də	ɢorɑ-'sə	ɢo'rɑ de	ɢo'rɑ gə
ɑ'gu 「娘」	ɑgu-'nə	ɑgu-'də	ɑgu-'sə	ɑ'gu de	ɑ'gu gə
ɢu'rɑŋ「三」	ɢurɑŋ-'nə	ɢurɑŋ-'də	ɢurɑŋ-'sə	ɢu'rɑŋ de	ɢu'rɑŋ ge

その一方で，大墩保安語ではある特定の副詞や形容詞にも，それらが表す数量や程度を際立たせるため，数詞の「一」を表すnəgəが文法化した接尾辞-gəが付くことがある。-gəが付いていない元の形式とそれが付いた形式とを，アクセントを付して(4)に示しておく。

(4)

jɑŋ'jɑŋ「何でも」	jɑŋ'jɑŋ-gə「何でも彼でも」
o'lə「半分だけ」	o'lə-gə「ちょうど半分だけ」
jɑŋ'tə「どのくらい」	jɑŋ'tə-gə 「ちょうどどのくらい」
undər「高い」	un'dər-gə「とても高い」

この-gəは，アクセントの立つ位置が格語尾と異なるとはいえ，普通名詞などに後置されるgəに比べれば，基本形との結びつきが強い。現に，'lɑgə「少し」とその重複形'lɑ'lɑgə「ほんの少し」のように，-gəが付いた形式が基本形として定着したがため，重複形が数量を際だたせる機能を担っているものもある[10]。あるいは，すでに-gəが付いた形式だけが定着したmə'təgə「ように」，'dzingə「僅か」のようなものさえある。そのため，自立性が強い接語とするよりは接尾辞とする方が適切である。

Тодаева(1964:22-23)と陳(1987:78)の記述が大墩保安語のかつての姿を示しているのであれば，現在のgəは，通時的には形式の変化に加え，自立性を得たことになる。しかし，語が接辞になる前には接語の段階を経るのが自然とする史的変化の教えにしたがうなら，両氏が接辞と接語とを区別せず，単に接尾辞とした可能性の方が高い。後者の通りとすれば，大墩保安語では名詞句に後置した数詞の「一」を表すnəgəと形容詞などに後置した数詞の「一」を表すnəgəとが異なる道を歩んでいることになり，注目してよい[11]。

4. gəの位置

大墩保安語のgəは，前節で接語であることが明らかになったが，名詞句の意味にしたがいある特定の名詞句の，しかもある特定の格形式にだけ後置されるgəは普通名詞(親族名詞，人間名詞，生物名詞，無生物名詞など)，不定代名詞，数詞には後置されるが，人称代名詞，指示代名詞，固有名詞にgəが後置されることはない。そしてその際，gəが後置される普通名詞，不定代名詞，数詞の格標示は主格形かゼロ対格形に限られ，対格(-nə)，

与位格(-də)，造格(-ɢɑlə)，奪格(-sə)など格語尾が付いたものにgəが後置されることはない。(5)から(8)にgəが後置された例を示す。(5)は普通名詞の主格形に，(6)は普通名詞のゼロ対格形に，(7)は不定代名詞の主格形に，(8)は数詞のゼロ対格形にそれぞれgəが後置された例である。

(5)　kɑndə-dʑi　gənɑŋnə　fɑʂi　gə　ɑlgu-də　rə-dʑi　suji　rə-dʑi　rə-tɕ.
　　争う-結　その後　僧　鎮圧-与　来る-結　故に　来る-結　来る-終過:客
　　「争いが起きて，僧が鎮圧に来たので，(私たちはここに)来た」

(6)　bə　ɢorɑ　gə　sɑŋlɑ-lə　ro.
　　私　雨　求める-目　来る
　　「私は，雨を求めに来た」

(7)　nɑdə　jɑŋ　gə　vɑ.
　　私に　何　存:客
　　「私には，あることがある」

(8)　ɢurɑŋ　gə　ɑpətɕir-o.
　　3つ　買ってくる-終過:主
　　「3つ買ってきた」

また，(9)のように複数形にもgəは後置される。この事実は，数詞にgəが後置される(8)とともに大墩保安語のgəが先行研究が述べるような名詞の単数形を表すのではないことを端的に示している。

(9)　loloŋ　kuŋ-lə　gə　rə-tɕ.
　　老人-複　来る-終過:客
　　「老人たちがやって来た」

さらに普通名詞を見ると，(10)のように形容詞や人称代名詞で限定された場合にもgəは後置される。しかし指示代名詞にgəが後置されないように，指示代名詞の限定用法にはgəは後置されない。

(10)

	形容詞 seχɑŋ「美しい」	人称代名詞 mənə「私の」	指示代名詞 tə「その」
verə「嫁」	seχɑŋ verə gə	mənə verə gə	*tə verə gə
hɑmsə「盆」	seχɑŋ hɑmsə gə	mənə hɑmsə gə	*tə hɑmsə gə

以上から，大墩保安語でgəがどのような名詞句に後置されるのかを整理して示せば，(11)のようになる。指示代名詞の限定用法は，指示代名詞に含めてある。

(11)　人称代名詞　指示代名詞　固有名詞　普通名詞　不定代名詞　数詞

←――――――――――――――――→　←――――――――――――――――→

gəが後置されない　gəが後置される
(主格形とゼロ対格形に限られる)

(11)は，「有生性の階層 animacy hierarchy」を反映したものである。そのため，大墩保安語でgəは，普通名詞より右に位置する有生性の低い名詞句には後置されるが，人称代名詞から固有名詞まで有生性の高い名詞句には

後置されない，とまとめることができる。この有生性の階層には，「定性 definiteness」（Comrie 1981），「固体化 individuation」（Timberlake 1977:162），「題目価値性ないしは話題のなりやすさ topic-worthiness / topic-worthy」（Hawkinson & Hyman 1974，Wierzbicka 1981:64-65），あるいは「社会的志向 sociocentric orientation」（Hanks 1990）などさまざまなパラメーターが関与しているとされる。大墩保安語でgəが後置される名詞句の範囲を見ると，対象が話し手と聞き手によって常に特定化される定の名詞句には後置されず，定／不定の関与もある[12]が，ここには同時に後の議論で明らかにされるように談話の話題 discourse topic が関わっている。大墩保安語のgəにもいろいろなパロメーターが関与しているのであろう。

以下，gəを後置させない人称代名詞，指示代名詞，固有名詞を「有生性の高い名詞句」と呼び，gəを後置させるそれら以外の名詞句を「有生性の低い名詞句」と呼ぶことにする。

5. gəの意味機能

大墩保安語のgəの意味機能が先行研究で指摘された「名詞の単数形」でないことはすでに明らかである。では，gəの意味機能は何であろうか。この点を明らかにするために，あらかじめ指摘しておかなければならないことがある。それは，gəを含む文を発話した場合，文中の他のどの要素よりもそのgəを後置した「有生性の低い名詞句」が強く発話されるという事実である。これは，gəによって「有生性の低い名詞句」に卓立（prominence）が与えられ，「有生性の低い名詞句」が文中の他のどの要素よりも重要なものと見なされていることを意味する。

実際，普通名詞の主格形にgəを後置させた（5）を，そのgəを数詞nəgə「一」に入れ替えた（12），あるいはそのgəを取り除いた（13）と比べたとき，「争いが起きて，僧が鎮圧にやって来たので，（私たちはここに）来た」という点では，（5）（12）（13）の 3 つの文に違いはない。

（5） kɑndədzi gənɑŋnə fɑʂi gə ɑlgudə rədʑi suji rədʑi rətɕ.
（12） kɑndədzi gənɑŋnə fɑʂi nəgə ɑlgudə rədʑi suji rədʑi rətɕ.
（13） kɑndədzi gənɑŋnə fɑʂi ɑlgudə rədʑi suji rədʑi rətɕ.

しかし，fɑʂi「僧」の捉え方には違いがある。数詞のnəgə「一」で限定された（12）は「ある僧，あるいは 1 人の僧が鎮圧に来た」ことを表し，（13）は「僧の人数については触れず，僧が鎮圧に来た」ことを表す。一方（5）は，gəによって「僧」にスポットライトがあてられ，他を排し「僧」だけが取り出される。つまり，（5）には排他性が含まれ，「僧以外のモノではなく僧が鎮圧に来た」ことを表す。

これまでにあげた例をさらにいくつか示す。（6）bə ɢorɑ gə sɑŋlɑlə ro.は，より正確には「私は，雨以外のモノではなく雨を求めに来た」，（7）nɑdə jɑŋ gə vɑ.は「私には，あること以外のモノではなくあることがある」，（8）ɢurɑŋ gə ɑpətɕiro.は「3 つ以外ではなく 3 つ買ってきた」となる。

このように大墩保安語のgəの意味機能は，Тодаева や陳が述べるような「名詞の単数形」にあるのではなく，それを後置した「有生性の低い名詞句」だけを取り立て，「X 以外のモノではなく X が／を」といった排他性を主張することにあると言える。これは，第 3 節で述べた副詞に付く-gəの機能と軸を等しくする。

さらに 2 つの事柄を述べておく。1 つは，gəの排他性が及ぶ範囲に関わることである。大墩保安語では数詞は名詞に後置されることもある[13]が，このときgəの排他性が及ぶのは（14）のようにその直前に置かれた数詞に限られ，名詞にまで排他性は及ばない。

（14） bə bidzi ɢurɑŋ gə ɑpətɕir-o.
私 コップ 3 つ 買ってくる-終過:主
「私は 3 つ以外ではなく 3 つコップを買ってきた」

（買ってきたコップの数は 3 つであり，それ以外の数ではない）

もう 1 つは，(15)(16)のように 1 つの文に比較元と比較対象 2 つの名詞句がある場合である。このときgəは,後置されるとしても,比較対象には現れず,もっぱら比較対象よりも文中で重要な比較元の方に現れる[14]。

(15) nə so mətəgə daŋtɕi gə o.
これ 海 ような 池 繁:客
「これは，海のような池以外のモノではなく池です」

(16) mangə sokaŋ bi-gə-təla gar gə bi-gə-gi.
私たち:包 藁の貯蔵小屋 建つ-使-限 家 建つ-使-形予:主
「私たちは，藁の貯蔵小屋を建てるよりも，家以外のモノではなく家を建てよう」

6. gəの談話機能

6. 1 談話分析の必要性

「有生性の低い名詞句」にスポットライトをあて，それだけを排他的に主張することがgəの意味機能であることも明らかになった。しかし，gəの出現頻度は高くない。ということはそれだけ特別な振る舞いをするわけであるが，gəがどのように使われるのかは 1 つの文だけを取りあげてみてもわからないことが多い。

次の(17)から(19)は，「雨を求めに来た」という点だけを見れば，3 つの文に違いはない。しかし，直接目的語であるgora「雨」の表し方が(17)ではgəを後置，(18)では対格形，(19)ではゼロ対格形と異なるように，文が表す意味には微細かもしれないが重要な違いもある。

(17) bə gora gə saŋla-lə ro.
私 雨 求める-目 来る:終過:主

(18) bə gora-nə saŋla-lə ro.
私 雨-対 求める-目 来る:終過:主

(19) bə gora saŋla-lə ro.
私 雨 求める-目 来る:終過:主
「私は，雨を求めに来た」

(17)と(18)における対格標示の有無には,それにより指示された名詞句が談話のなかで重要であるのかどうかが示され，必然的に聞き手の注意を引き寄せる働きがともなわれる。対格で標示された(18)のgora「雨」は談話で重要であり，聞き手もそのgora「雨」に関心を持つ。しかし，ゼロ対格はその点について何も語らず(19)のgora「雨」も中立的に示されているだけであり，聞き手もそのgora「雨」に関心を持つことはない。対格とゼロ対格のこうした機能の違いについては，すでに Comrie(1981:128-129)や Lyons(1999:204)が類型論の観点から論じている。

一方(17)は，gəが持つ排他性により，「雨以外のモノではなく雨を求めに来た」となる。しかし，gəを談話から見ると,そこにも対格目的語と同じように談話を展開していく過程で重要な要素であること示す働きがある。そのためgəと-nəの違いを談話からさらに検討を進めていくと，たとえば前者が談話の話題 topic を表し，後者がその談話を構成する個々の重要な要素を表すことが明らかにはなる[15]。

しかし，こうした点は 1 つの文をいくら検討してもわかることではない。gəがどのように使われるのかを明らかにしようと思えば，談話の展開過程を明らかにする談話分析がどうしても必要である。

6. 2 資料について

分析に用いたテキストの題名とタイプ，gəの出現数を(20)に示す。

(20)

題名	テキストタイプ	出現数
婚姻	体験談	6
保安腰刀	歴史的論述＋体験談	3
トリガガ	民話	1
トリガガとして語られた話	体験談＋民話	2
大工と彼の妻	民話	14
会話文１	会話	1
会話文２	会話	1

文法現象がテキストのタイプによって変容することは，十分に予想されうる[16]。民話と会話文とを比べた場合，談話を展開していく過程で，民話は着地点を目指して談話が進められていくため全体のまとまりがあるが，会話文はすべてではないにせよ，むしろ話題が次々と入れ換わっていくものであるという違いがある。実際，ここで取りあげたテクストもそのとおりではあるが，テキストタイプでgəの使われ方が大きく異なることはないようである。

6. 3 事例

6. 3. 1「婚姻」

「婚姻」は，保安族の婚礼について自分の息子の婚礼を例に，昔と今とを対比させつつ語られたものである。gəは下線を引いた 6 箇所(məngə kuŋ「私の息子」，imɑŋ nəguŋ「子山羊」(2 回)，ɑgu「娘」，dʐudzi「酒」，dʐu「酒」の後ろ)に現れるが，そのうちの 2 箇所は直前のくり返しである。

(21) a. bədə　bonɑn　kuŋ　verə　ɑpə-sə　bədə　tər　<u>mən-gə　kuŋ　gə</u>　nəŋgə.
私たち:排　保安　人　嫁　取る-仮　私たち:排　あの　私の-の　息子　このようである
「私たち保安人が嫁をもらうとき，私たち，あの一，<u>私の息子が</u>こうであった」

b. əu-lə　morə-nə　honə-dʐi　hol-ɢə-dʐo.　pu-nə　ekə-tɕo.　pu　ekə-tɕ.
若者-複　馬-対　乗る-結　走る-使-終継:客　爆竹-対　打つ-終継:客　爆竹　打つ-終過:客
ɑgu-lə　ɕinerə-nə　ɢui-dʐi　rə-sə　domə-də　rə-sə　ʂi　lə　nəguŋməɢɑ　ge-dʐi　gənɑŋnə
娘-複　花嫁-対　求める-結　来る-仮　婚礼-与　来る-仮　是　羊肉銭　送る-結　した後
dɑŋmə-də　ɕinerə　ɢui-gu　nə　<u>imɑŋ　nəguŋ　gə</u>　ter-dzi　rə-dʐo.
昔-与　花嫁　求める-形予　名化　仔山羊　抱える-結　来-終継:客
<u>imɑŋ　nəguŋ　gə</u>　ter-dʐi　rə-dʐi　gə-sə　əu-lə　bəl-dʐo.
仔山羊　抱える-結　来る-終継:主　という-仮　若者-複　奪う-終継:客
「若者たちが馬に乗り走らせている。爆竹を鳴らしている。爆竹を鳴らした。結婚を申込みに来るとき，嫁迎えに来るときは，羊肉銭(嫁迎えのとき新郎が新婦側親族に渡すお金)を送っているが，むかし結婚を申し込むときは<u>子山羊を</u>抱えてきていた。<u>子山羊を</u>抱えてきたことで言うと，若者たちが奪っていた」
(中略)

c. hanə-lə gədzi igua hanə igua halə ma χil-dʐo ma. da dedə-lə nenə-lə
みんな-復 と みんな どこに 助 歌う-終継:客 助 老爺-複 老婆-複
ida idagədzi gə χil-dʐo. ɕinerə agu χərdʐir-sə dzu hanə-də da kal-dʐi
一緒に 歌 歌う-終継:客 花嫁 出てくる-仮 すぐに みんな-与 話す-結
okə-tɕo. ɕinerə agu nə agu gə kal-dʐi χil-dʐo.
与える-終継:客 花嫁 題 娘 話す-結 歌う-終継:客
「みんなと，みんながどこでも歌を歌っている。老爺たちや老婆たちが一緒に歌を歌っている。花嫁は出てくるとすぐに，みんなと話をしている。花嫁は，花嫁が話をし，歌っている」
（中略）

d. daŋmədə i-sə bədə dʐudʐi gə dʐu gə a raku kal-dʐi okə-tɕo.
昔-与 繁:主-仮 私たち:排 酒 酒 ラク 話す-結 与える-終継:客
dasaŋ-də da bədə bonandzu ʂi lə dʐu-nə oloŋ u-dʐi ginə.
今-与 私たち:排 保安族 是 酒-対 多く 飲む-結 存:否:客
u-sə u-saŋ nə vi-sə kandə-dʐo.
飲む-仮 飲む-形完 名化 存:主-仮 言い争う-終継:客
「むかしであれば，私たちは酒を「ラク」と言っていた。今，私たち保安族は酒を多く飲まない。飲むと，飲んだら，言い争いになっていた」
（中略）

e. vər-də-go ja.
終わる-完-形予:客 助
「終わりにしよう」

ここでは，保安族の言語社会が保安語と漢語の 2 言語併用社会であることが大きく関わっている。「婚姻」を語る前にコンサルタントから漢語で，今から話すのは「保安族の婚礼」の話であるという説明があった。この漢語の説明は保安語で話された部分と 1 つのまとまりをなすものであり，「保安族の婚礼」が談話全体の話題となる。そのため，保安語で語られた最初の文(21a)におけるməngə kuŋ「私の息子」は，その話題の主人公として場面設定をするものとなる。その際，məngə kuŋ「私の息子」と直接関わりがないのがdaŋmə「昔」の出来事としてnəguŋməɢa「羊肉銭」との対比のもと語られた(21b)のimaŋ nəguŋ「子山羊」と，(21d)のdʐudʐi「酒」(及びその繰り返しのdʐu「酒」)である。そのため，imaŋ nəguŋ「子山羊」とdʐudʐi「酒」に後置するgəは，話題を，それが元に戻ったときgəが現れることはないので，一時的に転換するためのものとなる。一方，(21c)のagu「娘」に後置するgəは，一度は主題(nə)になっている。この場面は，みんなの前に姿を現した花嫁が，みんなと歌を歌う結婚式の山場のひとつである。したがってgəは，主題で標示されたagu「娘」にスポットライトをあてることで，その場面をまとめ締めくくるためのものとなる。

6. 3. 2「保安腰刀」

「保安腰刀」は，コンサルタント自身の体験に基づいて保安腰刀(保安族の民族アイデンティティを表す民族工芸品)のことだけでなく結婚や保安語のこと，また最初には保安族の歴史も語られた。しかも，この話にはvərdəgo.「終わりにしよう」で一度終えられたが，しばらくの沈黙の後再び語られはじめたという経緯がある。gəは，下線を引いた 3 箇所(faʂi「僧」，verə「嫁」，agu「娘」の後ろ)に現れる。

(22) a. bədə bonandzu nə doɢo-nə jasgə səu-nə. kal-dʐigu ʂi tantəgudə gatɕi o.
私たち:排 保安族 題 腰刀-対 作る 続ける-終現:客 語る-形継 是 かつて 話 繁:客

「私たち保安族は腰刀を作り続けている。語っているのはかつての話である」
（中略）

b. bədə tantəgudə taŋlə səu-dʐi gə-sə invi nə sə-nə daŋlə-d-o.
私たち:排 かつて そこに 暮らす-終継:主 という-仮 なので 題 水-対 さえぎる-完-主
sə-sə lagə daŋlə-d-o. kandə-dʐi gənaŋnə faṣi gə ɑlgu-də rə-dʐi
水-奪 少し さえぎる-完-主 争い-結 その後 僧 鎮圧-与 来る-終継:主
suji rə-dʐi rə-tɕ. rə-dʐi gə-sə bədə rə-saŋ nudə-gu-səla
それ故 来る-結 来る-終過:客 来る-終継:主 という-仮 私たち:排 来る-形完 今日-の-奪
nudə nəhoŋ-gu nudə-gu-səla ṣi nəgandʐuŋ deraŋ derəraŋ dʐirgoŋ hoŋ dʐi-dʐo.
今日 今年-の 今日-の-奪 是 一百 四 四十 六 年 行く-終継:客
「私たちがかつてそこに住んでいたことで言うと，水を止められた。水を一部止められた。争いが起きて，僧が鎮圧にやって来たので，（私たちはここに）来た。来たことで言うと，私たちが来た日から，その年のその日からは 146 年がすぎている」
（中略）

c. vər-də-go.
終わる-完-形予:客
「終わりにしよう」
（沈黙）

d. daŋmə-də bədə verə gə ɑpə-sə ɑgu gə okə-sə saŋ məsgu-nə məs-dʐo.
昔 私たち:排 嫁 取る-仮 娘 与える-仮 良い 服-対 着る-終継:客
pu-nə ekə-tɕo.
爆竹-対 打つ-終継:客
「むかし私たちは嫁を取るとき，娘を出すとき，良い服を着ていた。 爆竹を鳴らしている」
（中略）

e. dɑ vər-də-go jɑ.
さあ 終わる-完-形予:客 助
「さあ，終わりにしよう」

前半部（22a-c）の話題は，この話の前に今から話す内容について漢語で語られた「保安腰刀」である。そのため，（22b）のfaṣi「僧」に後置するgəは「保安腰刀」とは直接関わりのない話題へと一時的に転換するためのものとなる。民族移動の要因となったfaṣi「僧」の話題が終わると，話題は元の「保安腰刀」へと戻る。一方，（22d）のverə「嫁」とその類義語であるɑgu「娘」に後置するgəは，それらを後半部の話題として導入するためのものである。

6. 3. 3「トリガガ」

「トリガガ」は，雨を求めて天の神様の所に行き，望み通り雨を降らせ意気揚々と地上に降りてきたトリガガが，石につまずいたことで神様に騙されたと思い再度天に行き，大雨を降らせ地上の景観を一変させてしまったという，保安族を代表する民話である。gəは，場面が地上からトリガガが雨を求めに行った天へと転換すると同時に，文も地の文から会話文へと換わった 1 箇所だけに現れる。

（23） gɑŋ dzu ɑsmɑn-də dʐi-sə
すぐに 天-与 行く-仮

"bə ･･･ "
私
"tɕi　jaŋgə-lə　ro ?"
お前　何をする-目　来る:終過:主
"toligaga.　bə　<u>ɢora　gə</u>　saŋla-lə　ro.　bədanə　taŋlə　he-dʑi　da　satɕi
トリガガ　私　雨　求める-目　来る終過:主　私たち:排:属　そこに　日照りになる-結　今　土地
dzu　vesuŋ　de　os-dʑi　ginə.　jaŋ-lə　igua　ndagu　ginə.　bədanə　dʑoŋdʑi
すでに　草　も　育つ-結　存:否:客　何-複　すべて　食べ物　存:否:客　私たち:排:属　農作物
dʑoŋdʑi　os-dʑi　ginə.　dzu　ɢora　saŋla-lə　ro."
農作物　育つ-結　存:否:客　そのため　雨　求める-目　来る:終過:主
「すぐに天に行くと，
『私･･･』
『お前は何をしに来た』
『トリガガです。私は<u>雨を</u>求めに来ました。私たちのところは日照りで，今土地はすでに草も生えません。何ら，食べる物がありません。私たちの農作物は育ちません。だから，雨を求めに来ました』」

トリガガと神様のやりとりは直接話法であるように，独立した 1 つの談話として位置づけることができる。したがって，神様からの問いtɕi jaŋgələ ro ?「お前は何をしに来た」へのトリガガの返事bə ɢora gə saŋlalə ro.「私は雨を求めに来ました」の中に現れているgə，つまりɢora「雨」に後置するgəは，天でのトリガガと神様の会話という新たな場面の中にɢora「雨」を話題として導入するためのものとなる。この談話全体の話題が主人公のトリガガであることは誰の目にも明らかであるが，固有名詞であるためtoligagaにgəは後置されていない。

6. 3. 4「トリガガとして語られた話」

「トリガガとして語られた話」は，山頂に水を上げるためのポンプを敷設した政府のおかげで，かつては日照りになると取れなかった農作物が現在では豊富に取れるようになったことを，上述の民話「トリガガ」の内容を一部織り込んで語られたものである。gəは，下線を引いた 2 箇所(daŋmə daŋsə「昔話」，dzoŋdʑi「農作物」の後ろ)に現れる。

(24) a.　daŋmə-də　bədanə　nə　dzᵢedzi-də　nəgə　hoŋ-də　tɕuma　ginə.　vantɕuan　rəma　o.
昔-与　私たち:排:属　この　集落-与　ある　年-与　チュマ　存:否:客　完全な　ルマ　繁:客
rəma　sə-də　χandʑi　o　be.　sə-ɢalə　səla　da-dʑi　ginə.　sə　ginə.
ルマ　水-与　旱地　繁:客　助　水-造　水を撒く　できる-結　存:否:客　水　存:否:客
dzoŋdʑi　χaloŋ　hoŋ　tar-sə　nəgə　hoŋ　i-sə　səu-nə.
農作物　暑い　年　植える-仮　一　年　繁:主-仮　実る-終現:客
jasuŋ　hoŋ-də　dzoŋdʑi　rə-dʑi　ginə.
九　年-与　農作物　来る-結　存:否:客
「むかし，私たちの集落にはある年，チュマ(用水路の水を利用した灌漑地)がなかった。完全なルマ(灌漑できない耕地)であった。ルマは旱地(灌漑できない耕地)である。水を撒くことができない。水がない。農作物を暑い年に植えると，一年なら実る。九年，農作物は来ない」
(中略)

b.　tantəgudə　i-sə　ɢora-nə　saŋla-dʑi　bədə　<u>daŋmə　daŋsə　gə</u>　kal-dʑo.

かつて　繁:主-仮　雨-対　求める-結　私たち:排　大昔　故事　話す-終継:客
toligɑgɑ　ɢorɑ　saŋlɑ　rə-dʑi　rə-dʑi　ɑsimɑn-də　dʑi-dʑi　gənɑŋnə　ndɑŋ　χuinə-gu　gɑŋ-də-gu
トリガガ 雨　求める 来る-結 来る-結　天-与　行く-結 した後　戸　後ろ-の　瓶-与-の
sə-nə　sə　tolgə-dʑi　ɑsɢə-dʑi　gənɑŋnə　bədɑnə　nə　dʐedzi-nə　iguɑ　sə　tolgə-dʑi
水-対 水　押す-結　撒く-結　した後　私たち:排:属　この　集落-対　すべて　水　押す-結
undər　nə　undər　boɢloŋ　nə　boɢloŋ　hi　təruŋ　nə　hi　təruŋ-də.
高い　題　高い　低い　題　低い　山　頂　題　山　頂-与
「かつてであれば，雨乞いをして，私たちは昔話を語っていた。トリガガが雨を求めて天に行き，戸の後の瓶の中にある水をすべて押し倒して撒いてしまい，私たちの集落をすべて水が押し倒し，高い所は高く，低い所は低く，山頂は山頂に」
（中略）

c. dzoŋdzi **gə**　oloŋ.　vər-də-go　jɑ
農作物　多い　終わる-完-形予:客　助
「農作物が多い。終わりにしよう」

gəの 1 つは，結びの文(24c) dzoŋdzi gə oloŋ.「農作物が多い」に現れる。dzoŋdzi「農作物」とその類義語であるboɢdi mu「小麦畑」，ndɑgu「食料」は談話のなかで主題標識(nə) を取っており，それらを統括するのが結びの文のdzoŋdzi「農作物」に後置したgəである。つまり，ここでのgəは，この談話全体の話題であるdzoŋdzi「農作物」にスポットライトをあてることで，談話全体をまとめ締めくくるためのものである。一方，(24b) のdɑŋmə dɑŋsə「昔話」に後置する gəは，民話「トリガガ」の一部を一時的に導入するためのものである。「トリガガ」の話が終わると，それが導入される前の話，つまりは山頂に水を上げるためのポンプを敷設した政府のおかげで, かつては日照りになると取れなかった農作物が今では豊富に取れるようになった話へと戻っている。

6. 3. 5「大工と彼の妻」

「大工と彼の妻」は，金持ちから亡き自分の父のため天に宮殿を建てるよう命じられた大工が，妻とともに策を巡らし，金持ちの悪巧みを打ち破ったという保安族の民話である。gəは，14 箇所(kəχəndzi bajɑŋ kuŋ「憎たらしい金持ち」，seχɑŋ ɑgu 「美しい娘」，mudʐɑŋ「大工」，bɑvi dziliu seχɑŋ verə「極めて聡明な美しい嫁」，gɑr「家」(5 箇所)，guŋdzen「宮殿」(3 箇所)，jɑŋ「何か」，lulu 「やぐら」の後ろ)に現れるが，そのいくつかを見る。

(25) a. dɑŋmə-də　bonɑn　səu-dʑi　gə-sə　dʑifɑŋ-də　kəχəndzi　bɑjɑŋ kuŋ　**gə**　o.
昔-与　保安　住む-終継:主　という-仮　場所-与　憎たらしい 金持ち　繁:客
「むかし，保安族が暮らしていたとき，ある場所にいたのが憎たらしい金持ちであった」
（中略）
ənə　dʑifɑŋ-də　mudʐɑŋ **gə**.　χɑr　legə-dʑi　undər　o.　χɑr　undər　o.　mudʐɑŋ　mudʐɑŋ
この 場所-与　大工　手　働く-結　高い　繁:客 手　高い　繁:客　大工　大工
legə-dʑigu　le　moɢlə　sɑŋ,　moɢlə　seχɑŋ.　nə　jɑŋ　ʂi　lə　mudʐɑŋ-də
働く-形継　仕事 とても　良い とても　美しい　この とき　是　工-与
bɑvi　dziliu　seχɑŋ　verə **gə**　o.
非常に 聡明　美しい　嫁　繁:客
「この場所に大工がいた。手仕事の技術が高かった。技術が高かった。大工がする仕事はとても良く，

美しかった。このとき，大工のところにいたのが非常に聡明で美しい嫁であった」
（中略）

b. " ··· manə abo gu-tɕ ma. tɕentaŋ-də gar gə os-ɢə-gi gə-dzi.
私:属 父 死ぬ-終過:客 助 天-与 家 建つ-使-形予:主 言う-終継:主
tɕi mudzaŋ, tɕi tɕi-sə saŋ-nə da saŋ mudzaŋ ginə.
君 大工 君 君-奪 良い-属 しかも 良い 大工 存:否:客
guŋdzen gə os-ɢə-gi gə-dzi. go gar gə os-ɢə-gi gə-dzi. ··· "
宮殿 建つ-使-形予:主 言う-終継:主 大きな 家 建つ-使-形予:主 言う-終継:主
「・・私の父は死んだ。天に家を建てようと思う。大工よ，あなたより腕の良い大工は他にいない。宮殿を建てようと思う。大きな家を建てようと思う・・」
（中略）

c. " ··· da nə bə nadə jaŋ gə va. guŋdzen-də jaŋgi ? ··· "
今 題 私 私:与 何か 存:客 宮殿-与 どうする:形予:主
「・・今，私には策があります。宮殿は，どうしましょうか・・」
（中略）
mudzaŋ " da bə tɕentaŋ-də χər-dzi dzi-gi. bajaŋ kuŋ-nə nə jaŋ-nə gatɕi-nə tɕaŋl-e.
大工 今 私 天-与 出る-結 行く-形予:主 金持ち-属 この 度-属 言葉-対 聞く-意
guŋdzen gə os-ɢə-gi "
宮殿 建つ-使-終予:主
「大工は，『今，私は天に昇っていくつもりだ。金持ちのこのたびの言葉を聞こう。宮殿を建てよう』」
（中略）

d. ɢurudər-nə udər mudzaŋ mudzaŋ-nə verə raməgədzi lulu gə jasgə-dzi raməgədzi ʂi lə
三日-属 日 大工 大工-属 嫁 ただちに やぐら 造る-結 ただちに 是
ndzaŋ-nə holər-nə lulu-nə holər χudzi-dzo be.
彼-属 底 やぐら-属 底 塞ぐ-形継:客 助
「三日の間で，大工と大工の妻はただちにやぐらを造って，ただちにやぐらの底を塞いだ」

(25a)は，この民話の冒頭部である。主人公であるbajaŋ kuŋ「金持ち」，mudzaŋ「大工」，verə「嫁」にそれぞれgəが後置していることから，これらのgəにはこの民話の場面設定をする働きがある。(25b)は，金持ちが大工に自分の父のために天に宮殿を建てるように命じた場面での会話である。gar「家」とguŋdzen「宮殿」に後置するgəは，この会話の話題としてgar「家」とguŋdzen「宮殿」を導入するためのものである。さらにこの後，「家／宮殿を建てる」という文がgar「家」を用いて 4 回，guŋdzen「宮殿」を用いて 2 回繰り返される。(25c)は，天に宮殿を建てるための対策を練る大工とその妻のやりとりである。jaŋ「何か」に後置するgəは，大工の妻が考える具体的な対策を会話の話題として導入するためのものである。一方，guŋdzen「宮殿」に後置するgəは，大工がguŋdzen「宮殿」を建てることを決心することでこの会話は終結することから，場面を統括させるためのものとなる。(25d)のgəは，金持ちを打ち負かす手段である lulu「やぐら」を話題として導入するためのものである。

6. 3. 6 会話文

会話文を 2 つ見る。次の会話文(26)では，話題はtɕi「君」，ʂu「本(=勉強)」，todajeva「トダーエヴァ」と換わっていくが，gəは人称代名詞tɕi「君」と固有名詞todajeva「トダーエヴァ」には後置されず，普通名詞のʂu「本」にだけ後置されている。

(26) kal-dʐo. da kal-dʐo.
話す-終継:客 さあ 話す-終継:客
tɕi bə-ɢalə kal-sə ʂi tɕi kal-dʐigu bə kal-dʐigu-nə manə gatɕi degi
君 私-造 話す-仮 是 君 話す-形継 私 話す-形継-対 私たち:包:属 ことば 基本
da-dʐo be.
できる-終継:客 助
bə ʂu ndʑe-dʐi ʂu gə miɕi-gu-sə χəti kal-dʐo. gatɕi-nə madə-dʐi ginə be.
私 本 見る-結 本 読む-形予-奪 漢語 話す-終継:客 ことば-対 知る-結 存:否:客 助
tə todajeva todajeva de rə-sə bangeje bangeje harən tavuŋ-də-sə
あの トダーエヴァ トダーエヴァ も 来る-仮 半月 半月 十 五日-与-奪
manə gatɕi-nə igua kal-dʐo. tə jeʂi nodʐi saŋ ja. nodʐi. ･･･
私たち:包:属 ことば-対 すべて 話す-終継:客 あれ も 頭脳 良い 助 頭脳
「話そう。さあ，話そう。
君が私と話すときには，君が話していることは私が話していることを，私たちのことばが基本的にできている。
私は本を見て，本を読む(勉強する)ことで漢語を話している。ことばがわからなかった。
あのトダーエヴァ，トダーエヴァも来たとき，半月，半月，15 日めから私たちのことばをすっかり話していた。あれも頭が良かった。頭が。･･･」

次の会話文(27)は，コンサルタント(a)が自分の孫(b)に述べたものである。場面は，コンサルタントが孫にお茶を注ぐように言った場面から，孫の注いだお茶が溢れてこぼれてしまい，コンサルタントが孫に雑巾を持ってくるよう命じた場面へと移り換わる。gəは，その最後の場面で持ってくるように命じたmabu「雑巾」の後ろに現れる。

(27)(お茶を入れさせようとして)
a. dʐiɡə-nə ki-dʐi u ?
これ-対 注ぐ-終継:主 疑
b. ə ?
何
a. dʐiɡə ki-dʐi u ?
これ 注ぐ-終継:主 疑
(お茶がこぼれて)
a. aja ti taŋlə-sə mabu gə apətɕir. kika kika. nəχaŋnə.
何てこと ほらあそこ-奪 雑巾 持ってくる:命 速く 速く ここに
「(お茶を入れさせようとして)
a. これを，注いでくれないか。
b. なあに。
a. これ，注いでくれないか。
(お茶がこぼれて)
a. 何てこと，ほらあそこからぞうきんを持って来なさい。速く，速く，ここに」

6. 4 談話の話題標識gə

gəが談話のなかでどのように使われているのかをまとめると，(28)のようになる。

(28) a.　談話の冒頭部で，全体の話題を導入したり，場面を設定する。
b.　談話の途中で，a とは直接関わりがない話題へと一時的に転換する。
c.　談話の途中で，新たな場面の中に話題を導入する。
d.　談話の終結部で話題，ないしは一場面を統括する。
e.　直前の談話で導入した話題を同一語や類義語で繰り返す。

そして，第 1 節で見た「家ねずみともぐら」に 2 回 -geが現れたが，それらの -geもこの節で見てきたgəの用法と変わりはない。つまり，1 つめの -geは冒頭で全体の話題を導入するためのものであり，2 つめの -geは場面の転換(地の文から会話文(独り言))によって生じた新たな場面の中に話題を導入するためのものとなる。

とすれば，gəの談話機能は，それを後置させた「有生性の低い名詞句」が談話の話題であることを表す話題標識と見ることができる。

7. まとめ

数詞のnəgə「一」に由来する大墩保安語のgəについて，明らかになったことをまとめておく。

1. 形態素種別：接語
2. 位置：「有生性の低い名詞句」の主格形かゼロ対格形に後置
3. 音韻：その「有生性の低い名詞句」に卓立を付与
4. 意味機能：排他性(「X 以外のモノではなく X が／を」のように，他を排してgəを後置した「有生性の低い名詞句」だけを取り立てる)
5. 談話機能：談話の話題標識
   a. 談話の冒頭部で，全体の話題を導入したり，場面を設定する。
   b. 談話の途中で，a とは直接関わりがない話題へと一時的に転換する
   c. 談話の途中で，転換した新たな場面の中に話題を導入する
   d. 談話の終結部で話題，ないしは場面を統括する
   e. 直前の談話で導入した話題を同一語や類義語で繰り返す

今ここで述べてきたのは，大墩保安語の老人層の状況である。実のところ，馬福全氏が「若者は gəの使い方を知らない」と筆者に語っているように，若者層ではgəに再解釈が施され，注 11)に述べた「和らげ」の用法として，あるいは数詞の「一」を表すnəgəの異形態として使われている。どうやらこのgəが持っていた本来の用法は，大墩保安語から消えていくようである。若年層に起きているこの再解釈については，別の機会に論じることにしたい。

註

1）保安語積石山方言は，中国甘粛省臨夏回族自治州積石山保安族東郷族撒拉族自治県で話されている。話し手は，イスラム教を信じる保安族 16,505 人(2000 年)。このほかに保安語には，青海省黄南蔵族自治州同仁

県で話されている同仁方言がある。話し手は，チベット仏教を信じる土族。

2）保安語積石山方言の下位方言は，大墩保安語とそのほかの甘河灘保安語，高李保安語肖家保安語，斜套保安語の 2 つに大きく分けられる。詳しくは，佐藤(2003, 2005b)を参照されたい。

3）gəの由来を，大墩保安語の話し手の中には数詞の「一」を表す本来語のnəgəではなく，漢語の「个」に求める人もいる。しかし，先行研究や(下位)方言の音形式が示すように，gəは明らかに数詞の「一」を表す本来語のnəgəに由来する。

　ところで，甘河灘保安語はgəこそ認められないが，数詞の「一」を表すnəgəがそのnəgəという音形式のまま大墩保安語のgəと同じ機能を担っている。筆者が採集した『保安人の腰刀』というテキストを検討すると，名詞に前置したnəgəが 3 箇所に現れ，談話の話題を表している。そのほかの高李保安語，肖家保安語，斜套保安語については，はっきりとしない点もあるが，肖家保安語はgəを持つようである。

4）グロスに付した略号は以下のとおり。属(属格)，対(対格)，与(与位格)，造(造格)，奪(奪格)，複(複数)，包(包括形)，排(排除形)，形継(形動詞継続)，形完(形動詞完了)，形予(形動詞予定)，結(結合副動詞)，目(目的副動詞)，仮(仮定副動詞)，限(限界副動詞)，終現(終止形現在)，終過(終止形過去)，終継(終止形継続)，使(使役)，命(命令)，完(完了)，名化(名詞化)，主(主観範疇)，客(客観範疇)，題(主題)，繁(繁辞)，存(存　在)，否(否定)，疑(疑問)，助(語気助詞)。

5）保安語同仁方言については陳(1987:78-84)，土族語互助方言については Todaeva (1970)，Тодаева (1973:43-44)，照那斯圖(1981:17-18)，李(1983)，角道(1989, 1991/1992)，土族語民和方言については Slater(2003:98-102)，康家語については斯欽朝克圖(1999:89-94)の研究がある。

6）Тодаева(1964)は，キリル文字をローマ字に翻字して示す。

7）「家ねずみともぐら」に現れる-ge については，6.4 節を参照のこと。

8）この-ngəという表記は，正確には-ŋgəと思われる。-ngəは，-ŋgəの簡略表記であろう。

9）漢語から借用した語の保安語でのアクセントは，漢語の声調にしたがい，その高い音節に現れる。この点については，Li(1986)が甘河灘保安語を例に詳細に論じている。

10）lɑgə「少し」を布和 劉(1982:57)ではlaŋgəと記しているが，これはŋgəのŋが消える 1 つ前の段階を表している。

11）数詞の「一」を表すnəgəの発展に関連して，nəgəがその音形式(アクセントも語末音節に立つ)のまま使用されても数を表さない用法２つをさらに指摘しておく必要がある。

　1 つは，nəgəが対格を伴った目的語名詞句に後置される場合である。このときのnəgəは，動詞句が表す事態を取り立てる。そのため，nəgəは，叙述文の場合，動詞句が表す事態実現に不可欠な話し手(文の主語)の願望を表出し，その願望が聞き手に向けられると，聞き手には強い働きかけが及び，聞き手は自分の意志とは関係なく，動詞句が示す行為をいやでもおこなわなければならない制御不可能な環境に置かれる。(1)は，tɕi jɑŋgələ ro?「あなたは何をしに来た」への答えである。(1b)には，(1a)に比べ話し手が来た理由，つまりは「雨を求めるため」といった願望が強く表されていると同時に，その願望を達成するため話し手からの強い働きかけが聞き手には及び，聞き手は自分の意志に関わりなく，「雨を提供し」なければならない制御不可能な立場にあることが含意されている。なお，(1c)のようにゼロ対格の目的語名詞句にnəgəを後置させた文は非文である。

(1) a.　bə　ɢorɑ-nə　sɑŋlɑ-lə　ro
　　私　雨-対　求める-目　来る:終過:主
　　「私は，雨を求めに来た」
　b.　bə　ɢorɑ-nə　nəgə　sɑŋlɑ-lə　ro.
　　私　雨-対　求める-目　来る:終過:主
　　「私は，雨を求めに来た (あなたは自分の意志に関係なく，雨を私に提供しなければならない)」

c. *bə　ɢora　nəgə　saŋla-lə　ro
　私　雨　求める-目　来る:終過:主

話し手の願望が聞き手に向けられない(2a)と(2b)にも，nəgəの有無により次のような意味の違いがある。

(2) a. gaŋ　dzu　ndaŋ　χuinə-gu-sə　gaŋ-də-gu　sə-nə　tolgə-dʑi　ɕargə-tɕ.
すぐに　戸　後ろ-の-奪　瓶-与-の　水-対　押す-結　ひっくり返す-終過:客
「(トリガガは)すぐに戸の後ろで瓶の中の水を押しひっくり返した」
b. gaŋ　dzu　ndaŋ　χuinə-gu-sə　gaŋ-də-gu　sə-nə　nəgə　tolgə-dʑi　ɕargə-tɕ.
すぐに　戸　後ろ-の-奪　瓶-与-の　水-対　押す-結　ひっくり返す-終過:客
「(トリガガは)すぐに戸の後ろで瓶の中の水を(自分の望み通りに)押しひっくり返した」

もう1つは，命令文において動詞にnəgəのみを前置された場合である。このnəgəは，「和らげ」の意味を持つ。

(3) a. tɕi　kal　da.
君　話す-命　助
「話してください」
b. tɕi　nəgə　kal　da.
君　話す-命　助
「話してくれませんか」

12) とはいえ，gəの機能を不定とするのは適切ではない。次節以下からわかるように，不定の名詞句すべてにgəが後置されるわけでもなく，反対に定の名詞句にもgəは後置される。
13) 保安語はSOV型の言語であるが，数詞と名詞の語順は「数詞－名詞」と「名詞－数詞」の2通りが可能である。通例，前者の語順は名詞が時間など連続体を成し個を知覚できないものに使われ，一方後者の語順は名詞が個を知覚できるものに使われる。たとえば，ɢuraŋ udər「3日」，morə ɢuraŋ「3頭の馬」。
14) (15)のso「海」とdaŋtɕi「池」はチベット語アムド方言からの借用語であるが，これらの語が理解できる若者はほとんどいない。また，話し手の中には(15)は保安語として不自然であり，nə daŋtɕi so mətəgə o.「この池は海のようだ」の方が自然とする者もいる。
15) 次は，6.3.1節で見る大墩保安語のテキスト「婚姻」の冒頭部である。最初の文のməngə　kuŋ「私の息子」がgəによりこの談話の話題(厳密には6.3.1節で見るように話題の導入というよりは場面の設定と言う方がふさわしい)であることが示され，第2文のmorə「馬」と第3文のpu「爆竹」が対格を付けることで，それぞれの名詞が重要なものであることが示されている。これらの名詞は初出が対格，既出がゼロ対格であり，対格が新情報を表し，ゼロ対格が旧情報を表している。大墩保安語で初出名詞が常に対格を取るわけでもないが，今ここで見た初出が対格，既出がゼロ対格という関係は少なからず認められ，注目に値する。

bədə　bonan　kuŋ　verə　apə-sə　bədə　tər　mən-gə　kuŋ　**gə**　nəŋgə.
私たち:排　保安人　嫁　取る-仮　私たち:排　あの　私の-の　息子　このようである
əu-lə　morə-nə　honə-dʑi　hol-ɢə-dʑo.　pu-nə　ekə-tɕo.　pu　ekə-tɕ.
若者-復　馬-対　乗る-結　走る-使-終継:客　爆竹-対　打つ-終継:客　爆竹　打つ-終過:客
(中略)
morə　hol-ɢə-dʑo.

馬　走る-使-終継:客
「私たち保安人が嫁をもらうとき，私たち，あの一，私の息子がこうであった。若者たちが馬に乗り走らせている。爆竹を鳴らしている。爆竹を鳴らしている。（中略）馬を走らせている」

16）文法現象とテキストタイプとの関係については，工藤（1995）を参照されたい。

参照文献

布和 劉照雄（1982）『保安語簡志』民族出版社
陳乃雄編（1987）『保安語和蒙古語』内蒙古人民出版社
李克郁（1893）「土族語中-nge（-ge）的用法」『青海民族学院学報（社会科学版）』3，54-61.
斯欽朝克圖（1999）『康家語』上海遠東出版社
照那斯圖（1981）『土族語簡志』民族出版社
角道正佳（1989）「土族語（モングォル語）における接尾辞-ngge について」『大阪外国語大学論集』1，1-27.
角道正佳（1991/1992）「李克郁「土族語中-nge（-ge）的用法」」『日本モンゴル学会紀要』22/23，57-70.
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房
佐藤暢治（2003）「保安語積石山方言の下位方言と帰属意識 －話者の視点からの考察－」『東アジア言語研究』6，19-29.
佐藤暢治（2005a）『大墩保安語のテキスト』（平成 14～16 年度科学研究費補助金若手研究（B）「中国積石山地域の消滅の危機に瀕した言語，保安語の調査研究」），広島大学
佐藤暢治（2005b）「大墩村でのあるエピソード」『東アジア言語研究』8，37-46.
Comrie, Bernald (1981) *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*, Blackwell.
Hanks, Williams（1990）*Referential Practice: Language and Lived Space Among Maya,* University of Chicago Press.
Hawkinson, Annie and Larry M. Hyman（1974）Hierarchies of Natural Topic in Showa. *Studies in African Linguistics* 5:147-170.
Li, Charles N. (1986）The Rise and Fall of Tones through diffusion. *Proceedings of the Twelfth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 173-185.
Lyons, Christopher (1999) *Definiteness,* Cambridge University Press.
Slater, Keith W.（2003）*A Grammar of Mangghuer:A Mongolic Language of China's Qinghai-Gansu Sprachbund.* Routledge Curzon.
Timberlake, Alan（1977）Reanalysis and Actualization in Syntactic Change. Li, Charles. N.(ed.) *Mechanisms of Syntactic Change*, 169-183. Austin University of Texas Press.
Todaeva, B. Ch.（1970）Zur Frage der Bedeutung Singularsuffixes in der Sprache der Monguor, Louis Ligeti（ed.）*Mongolian studies*, 561-563, Akademiai Kiado.
Wierzbicka, Anna（1981）Case Marking and Human Nature. *Australian Journal of Linguistics* 1: 43-80.
Тодаева, Б. Х.（1964）Баоанский язык. Москва: Академия Наук СССР.
Тодаева, Б. Х.（1973）Монгорский язык. Москва: издатательство《наук》главная редакция восточной литература.

Dadun Bonan *gə* Developed from the Numeral "One"

SATO Nobuharu
Associate Professor,
Graduate School for International Development and Cooperation
HIROSHIMA University, Higashi-Hiroshima, 739-8529, Japan

The Dadun Bonan language has *gə* developed from the numeral "one", which seldom appear in discourse. While previous studies describe it as a singular suffix, analysis of these studies are insufficient because (1)it is syntactically an independend word, but phonologically attaches to a preposed word, and (2)it can be postposed not only to common nouns, but also to numeral, plural nouns and so on.

This paper aims to show characteristics of *gə* as follows.

1. Morpheme Classification: Clitic
2. Positions: Postposed to nominative or zero-accusative forms of lower in animacy, such as common nouns etc, while it is not postposed to higher in animacy, such as person pronouns, demonstrative pronouns and proper names.
3. Phonology: Give Pominence to the proposed lower in animacy.
4. Semantic Function: Exclusivity
5. Discourse Function: Discourse topic marker, which is used as (a)topic-introducing or scene-setting at the opening of discourse, (b)temporary topic-shift at the middle of discourse, (c)topic-introducing in a new scene at the middle of discourse, (d)topic- or scene-concluding at the closing of discourse, (e)repetition of a topic which has just been introduced in the immediately prior discourse.